

SHIZUKA HIROSE
廣瀬 惺

対談

BUNYU OGASAWARA
小笠原文雄



廣瀬 惺(ひろせ しずか)先生
1946年 岐阜県揖斐川町坂内生まれ
大谷大学文学部、同大学院博士課程満期
退学。真宗教学研究所助手を経て、1998
年より同朋大学教授(現在に至る)
大垣教区第9組妙輪寺住職



小笠原 文雄(おがさわら ぶんゆう)先生
1948年 岐阜県羽島市生まれ
岐阜市小笠原内科 理事長兼院長
岐阜在宅ホスピス研究会 代表世話人
岐阜教区第6組傳法寺

医療の現場から学ぶ

「いのちの大切さ―老いと臨終―」

人は、必ず死にます。
人生の最後は安らかな死であ
ることを誰もが願います。でも、
病院で終末を迎え亡くなった
人の多くは、苦悶状顔貌と呼ば
れる苦しんだ顔で亡くなります。
どんなに医療設備の整った大
病院でも同じです。
ところが、在宅で亡くなった人
の顔は、安らかな顔が多いのです。
なぜでしょうか？また、安らか
とはどういうことでしょうか？
真宗の教えは、老いと臨終にど
う関わっていくのでしょうか？
在宅ホスピスに力を注がれる
小笠原内科院長小笠原文雄先
生と同朋大学教授廣瀬惺先生
の対談を通して、医療と真宗の
立場から現在の終末医療の問
題と課題を明らかにしていき
たいと思います。

まなざし

ドキュメンタリー番組に
一組の夫婦が出ていた
隣村同士 互いに一目ぼれだった
今は 共に六十代
しいたけづくりの名人 といわれた夫は
アルツハイマー病で
起きている間中 徘徊する
時々「うん うん」と 返事だけする
妻は
小学校も出ていない自分を選んでくれた夫に
今も感謝している
そして
夫の介護としいたけづくり



ある日
陽の当たる縁側で
妻が夫の髭を剃ってやっている
夫は 妻の顔に見入る
まるで 赤ちゃんが
覚えたての母親の顔を 目で追う時のように
言葉も失い
人間であることから 徐々に遠ざけられながら
夫は まなざしを向ける
全幅の信頼と 欲びの まなざしを
妻に―
その時 優れて 根源的な 二人

編集後記

◇しあわせて何だろう◇

岐阜同朋に関わり、およそ2年。メン
バーに恵まれました。いろんな意
見も真摯に聞いてもらえました。と
ても、勉強にもなりました。心より感
謝しています。でも、自分自身の力不
足による挫折感は埋めることができ
ませんでした。

風鈴がとても懐かしく感じられる
季節になりました。わずかな風をも
受け入れ、予想しがたい不規則な音
と映像で風を表現し涼しさを運んで
きます。私の心をとらえます。私は、
少し、しあわせになれます。

風鈴ではないですが、

風車(かざぐるま)

風の吹くまで

昼寝かな

広田弘毅の一句が思い出されます。

榎田昭裕

8p「詩」

三条教区第二十組 金寶寺 朝倉安都子
詩集「アルバムの中で」より

8p「写真」

岐阜教区第一組 上宮寺 小笠原 宣

発行 岐阜教区教化委員会

真宗大谷派岐阜教務所

鈴木宏雄

〒500-8054

岐阜市大門町1

Tel.058-2666-1378

編集 岐阜同朋編集委員会

「現代と真宗」

小笠原文雄

対談

廣瀬惺

いのちの大切さー老いと臨終ー

《小笠原先生》

人は生老病死の中で、老いという人は病気になる時、病気を治してまた健康になりたいと願うでしょう。一方で、その病気が治らないかもしれないと知ったとき、命のつきるまで自分らしく安らかに生きたいと思うものです。しかし癌の患者さんの多くには、困難な延命治療を行い、その結果、苦悶状態顔で亡くなられる方が非常に多いんですね。

苦しいのになぜ延命治療を行うのか、それは現在の日本の医療体制も一因かもしれません。最近では、延命



ければ、いのちの大切さはわからない。」

これは、学生のとくに会った言葉なんです。

「いのちより大切なもの」とおっしゃってられる「いのち」は、仏教で申しますと、宿業としてのいのちというのでしようか。迷いの身としてのいのち。今のお話で申しますと、いろんな問題をかかえて生きているいのちですよね。

そうしますと、そういういのちがいきなり大切だということには結びつかない。それが、私たちの現実の姿といえますか、あり方だと思いませんか。



そこでさらに、曾我先生は、「いのちより大切なものがわからなければ」とおっしゃっているわけでしょう。いのちより大切なものとの出会いといえますか、目覚めにおいて、はじめ

てごちゃごちゃしている人間の生ですけれども、それはじめて大切だということになる。そして、そういうものに出会うというところに、真宗のはじまり、出発点があると思うんですね。

そのことにおいて、はじめて現実のいのちが尊いと言えるというのは、いのちより大切なものを尋ね明らかにしていく、かけがえのない現実、場所になっていくということがあるからでしょうね。宿業の現実そのものがです。迷いながら生きている、その場所が、そのまま大切な、かけがえのない場所になっていく。そこに、はじめ

治療に対して疑問視する声も上がり始め、患者さんの意思を尊重する動きになってきていますが、日本の医療はまだ延命治療する方向にあるんです。それは患者さんの意思や医師の意向というより、大きな病院では回復に向けて治療を行う場合が多く、最先端医療に専念し、治療に最善を尽くすことによるもので、そこに患者さん自身の気持ちもなかなか反映されないのも事実です。

それに対して、在宅医療というのは、人生の最期に患者さんの思いが尊重され、自分の住み慣れた場所での治療が可能になりますから、精神的負担や心の痛みも軽くなります。つまり在宅医療とは、患者さんの病気の治療とともに、傾聴を重んじる心のケア、さらにご遺族になられるであろう方達のグリーフケアにも心がけ、安らかな最期を迎えていただくということなのです。実際そういうケアによって思った以上に長く生きられる患者さんも多くおられるんですよ。

大きな病院での延命治療が良いのか、在宅での安らかな治療が良いのか、それは患者さんによって考え方が様々であると思いますし、どちらが正しいということはありません。ですが、元氣なうちに残された人生をどう過ごしたいのか、どこでどのように最期を迎えたいのかをしつかりと家族やまわりに伝える場所、実際になっていくと思

い場所に、実際になっていくと思

そして、安らかな死ということですが、もちろん人間としてですね、苦しくないことを願うとか、いろんな対応を願うということがあるわけです。やはり、対応をしながら生きていくわけですね。けれども、飛躍した言い方になるかも知れませんが、親鸞聖人の教えを学んでいられる私から言いますと、もし、それだけであると言いますなら、結局のところ、人生が空言、戯言になつていくのではないかとということが教えられていくと思います。

そういうことが、僕は親鸞聖人の教えの中心部分ではないかと学んでいるわけです。真宗ということでは申しますなら、対応しながら生きていくその現実そのものが、法を聞き開いていく場所として、自分にいただかれていくのかどうなのかという一点だと、僕は了解しておるんですけどね。

ー仏教ビハーラとホスピスー

《小笠原先生》

僕は今、世話人としてドクターが90人ぐらい加入している岐阜在宅ホスピス研究会という会の代表世話人をしていきます。ホスピスライフという在宅

えておくことが大切だと思えます。なぜならいろんな考え方の医師がいますし、思いも様々なんです。大きく分けると治療が目的である大きな病院では「患者さんに生きるための治療を行う医師」となるでしょうし、在宅医療では「患者さんの生き方を尊重する医師」になるでしょうか。また、もし患者さん自身が在宅医療を希望していても、思いがまわりに伝わっていないければ死の間際にご家族が救急車を呼んでしまい、救急医療を提供することが前提である病院で延命治療を行うことになりがちです。すると患者さんの思いが満たされず、家族も辛い思いをし、医療費もかかってしまうことになるのです。

こういった人生の最期に関する話に、我々医療者だけでなく、宗教者の方が日頃から触れ、いのちの大切さを話し合い、終の棲家をどこにするのか、正面から向き合い、人間の尊厳を守っていくことが大切ではないでしょうか。

《廣瀬先生》

いのちの大切さということが、今の時代の大きなテーマになっているという事があるわけですね。どう、いのちの大切さということをやらずにいていけばいいのか。そのことに関して思い出しますのが、曾我量深先生の言葉です。「いのちよりも大切なものがわからない

医療を進めているのですが、最初「ホスピス」にしようか、「ビハーラ」にしようかものすごく迷ったんですね。「ホスピス」と言うのは「ホロス」っていうのが語源になっていまして、ギリシャ語で「癒し」という意味なんです。昔はホスピスという言葉はキリスト教のものというイメージもありましたが、現在では「安らぎ」や「癒し」という意味に使われ、医療の現場でも普通に使われている言葉になりました。大切なのは言葉ではなく、より多くの人の苦しみを救うことなので、すでに定着しつつあるホスピスという言葉を使うことで、周囲に認知されやすく医療も進化していくと考えたのです。

人は病気になる時、老いたときに、残りの人生について考えることが多くなります。充実した人生を送り、自分の思いが満たされた最期を生きるという事が、いのちを大切にすることにつながるのではないのでしょうか。

《廣瀬先生》

ビハーラよりホスピスと言った方が実効性があるというのは初めてお聞きしました。私も同朋大学にビハーラをすすめている先生がおられるものから「もつとビハーラを打ち出してほしいんじゃないか」と、こう思っていました。今先生の話をお聞きしてなるほどそういうことがあるの



だなあと思つたかされました。
ただ私、一度しかご講演をお聞きしたことがないんですけれども、大分の田畑正久先生という、国東でピハラの会をなさっておられるお医者さんがおられます。この方はお寺の方ではないんですけれども、細川巖さんという方を通して親鸞聖人の教えに出会われて、たしか病院で聞法会をなさっておられる。そういう方向性でもってピハラを提唱されている方だったと思います。

—安らかな死と往生—

《小笠原先生》

先生のお話をお聞きして、人として安らかな死を願う気持ちにはありませんが、死を迎える際に伴う苦しみを自然な形で受け入れ、それに対応していくということから何かを見つけて、また、本当のいのちの大切さを学ぶという考え方も知ることができました。先生がおつしやられるように、死ぬ間際に何かを見出すことも人生の最期としては素晴らしいことかもしれない。苦しみがら最期を迎えるということがいけないことなのではなく、人生の最期をその人が望む形で送り出してあげるといえる。

我々医療従事者としてよろしいのではないのでしょうか。

《廣瀬先生》

人の一生が平安に終わっていくことを親鸞聖人は、即得往生とは言われな。死にさまで往生かどうかを決めることを否定していかれるんです。平安な状況で亡くなる場合はそれだけで済ませない方がいい。しかし、では、苦しみがら死んでいった場合は即得往生でないとする、その人の生涯というものは駄目なのかという事になっていきます。

《小笠原先生》

親鸞聖人の亡くなり方が、今のお話に即して申しますと、どうも平安な死に方じゃなかったのではないかと。ふしがございませぬ。聖人と一緒に住んでいた娘さんからそのような内容の手紙を、聖人の奥さんのところへ出しておられるわけです。それに対して奥さんが、いやあ、そうじゃない、あなたの父さんは、めでたく往生した人だといふ返事のお手紙を出しておられるわけです。そのことをどこでおつしやっておられるのかと言いますと、生涯の中で出会うべきものに確かに出会った人だといふ、その一点において親鸞聖人のご生涯というの、まさに往生を遂げられた生涯だったということ。私に言われていられるわけです。私は、そういう

ところにこだわりたいと思うんです。生涯に出会うべきものに会おうと申しますか、親鸞聖人が課題にされたような、そのような問題が、現代の時代に大事な問題としてあるのではないのでしょうか。そういうことを思うわけですから、状況としては、私も死が近づいてきていますから、やはりできるならば、先生方のお力をいただけて、苦しまないような死に方をしたいと思えます。しかし、そのことをもって即得往生とする方向性というの、親鸞聖人の仏教とは違わぬないか、感じて居るんです。

《小笠原先生》

往生というもののなかなかわかりにくい面、深い面が先生のお話で分かったような気がします。

《廣瀬先生》

ある意味、親鸞聖人がおつしやる往生というのは、どう言ったらいいんでしょうかね。豪気さや申しますか、たとえば死を前にするならば、そのことを通して往生としての人生を明らかにしていくと言いますか、そういう、一つの骨太さというんですかね、そういうものを僕は方向性としてはつきりしていけたらなあという思いがあるんです。

(終)



いよいよ自坊を

教員を退職すると同時に受けた組長職が三年目に入りました。組会(十二月を除く年九回)の準備、組門徒会の打合せや運営などはなかなか大変で、今までの組長さんの苦労に頭が下がりました。

その中で、最も大変だったのは推進員養成講座を受けたことです。遠い昔の「特伝」を経験した住職は一人もいなく、ゼロからのスタートだったからです。

しかし、得るものも数多くありました。組教化委員会が必然に迫られ発足し、住職・坊守・門徒の代表が意見を交流するようにな

ったこと、十一ヶ寺であることから全住職、全坊守がスタッフとして関わったこと、若手住職が講座の中で三十分の講話や座談会の司会・記録で大活躍をしたことなど、今後の組教化に生きる人的関わりが構築されたと思います。

そして私自身にも収穫がありました。講座を通して良き理解者が五人もできたこと、「いよいよ自坊での教化活動だ！」という意欲が湧いてきたことです。

まずは、夏休みの少年教化の充実。次に十余年続いた「正信偈の会」を母体として「同朋の会」を発足。そして、本堂を老人のためのサロンに。これらから手がけていこうと思えます。

第五組 淨福寺住職

三宅 順忍

坊守って・・・?

暑さを感じる頃となってきました。

本堂へお参りしてお華を見ると、

「あ、夏がくると、またお華がすぐのためになるなあ。」と、そんな事を思ってしまった。

今は亡き先々代住職が、「どんな華でもええが、枯れたお華だけは立てておけんからなあ。」と言っていたのが思い出されます。

お華立ては住職がやらなければならぬものではないと思えますが、坊守がやらなければならぬ事でもないと思えます。

でも、誰かがやらなければならぬ事。その誰かが、今は私なんだろうなと思っています。

先日御門徒さんが、御法事の相談にこられました。その時、日時の他、

「坊守さんやから聞くんですけど、今度の法事、どれくらいの範囲で(親戚をよんだらいいんやろか。引き出物を〇〇〇物にしようと思っんやけど、どうやろか。」と、そんな話までしていかれました。

住職と違って、坊守にはなんでも話しやすい、という事だったらしいです。住職のように三部経はよめませぬし、儀式作法も詳しく知らない私なので、詳しく話し易いと言われ、なんとなく嬉しさを感じました。



匿名希望

暑い盛りに大渋滞、都会の墓地で大混雑のお盆。
 「お盆くらいはお墓まいりしなきゃ」と聞いてはいるもの、お盆って一体何だろう？お盆に3つのイメージが混ざっているということ、そして親鸞聖人の教えと関係があるのかどうか、調べてみました。
 どうぞご一読ください。



お盆って、
 一体何ですか？



「お盆」とは「盂蘭盆」という梵語の略称です。お釈迦さまの弟子の目連尊者が餓鬼道に堕ちた亡き母のため、三ヶ月続く雨期の安居の修行の最終日である七月十五日に、山海百味の五果を盆に盛り僧侶たちを供養すること
 で母を救い出したと、盂蘭盆経というお経に説かれているのが、お盆の由来です。
 中国、そして日本で、盂蘭盆会という先祖供養の法会が営まれてきましたが、盂蘭盆経は、儒教の影響を

受け、父母恩重経などとも中国で成立したものと現在では考えられています。

お盆

ビツジ
 スムイン

他宗では施餓鬼を大事にすると思いますが、それは何ですか？



お釈迦さまの弟子の阿難尊者が修行していたとき、口から火を吹く恐ろしい餓鬼が現れ、「お前は3日後に死んで餓鬼道に堕ちる」といいます。驚いた阿難尊者がどうしたらよいかその餓鬼に尋ねたところ、
 「仏・法・僧の三宝、そして無数の餓鬼たちに食物を施して供養しなさい」と説かれ、お釈迦さまにその方法を探ねて寿命を延ばしたと『救拔焰口餓鬼陀羅尼經』にあります。
 他宗では、仏壇前に提灯を飾り供物を供えますが、真宗では施餓鬼会は勤めません。



灯籠流し、迎え火、送り火って仏教行事なの？

お盆の13日、お墓に先祖を迎えに行き、15日或いは16日の夜に先祖を送り出すという習慣は、実は仏教にルーツを求めることができません。

神道の精霊祭というような、日本固有の死後観や民俗行事がお盆と結びついたものと考えられます。
 盆提灯、お盆の墓参り、なすやきゅうりで作る先祖の乗る牛や馬、いずれも本来仏教にない霊信仰を根底においています。



お盆と一言でいっても、先祖供養、施餓鬼、霊信仰の3つが一緒になって扱われているようです。お盆を「先祖をしのぶ日」とする日本人の宗教観一般を表しているともいえますが、親鸞聖人の歩まれた仏道とは大きく違うようです。
 親鸞聖人は「父母の孝養のため」と、一返にても念仏もつしたること、いまだそつらわず(歎異抄)とおっしゃられました。それは念仏を先祖供養とはしないということなのです。
 念仏とは、仏に気づかされるこの身のありさまをそのまま受け止め、そのままにかけがえのないものと歓べる体験なのです。真宗におけるお盆とは、毎日毎日、目先の忙しさに振りまわされている私たちが、「ご先祖を想い」わたしの生き方これだいいのだからか」と仏教の教えの大切さに気づかせて頂く大切なご縁であります。